

2022年2月13日 礼拝説教要旨

詩編講解説教97「愛すべき王」

詩編97：10～12、マタイ22：34～40

詩編第97編は第96編に続いて「王の即位の歌」と呼ばれるものです。9節に「あなたは主、全地に君臨されるいと高き神。神々のすべてを超え、あがめられる神」とありますが、すべての神々を超えて全地を支配される唯一まことの神さまを王として讃える内容となっております。今日は特に後半の10節以下に注目しましょう。ここには「王」である神さまとそのご支配の下にあるわたしたち人間との関係性が表されています。

一般的に支配する者とされる者の関係は力によるものです。七十人訳聖書では97編に「国が回復された時のダビデの歌」という表題が付されておりますが、この詩の背景にもやはりバビロニア捕囚が影響しています。イスラエルにはバビロニアやペルシャ、ローマといった周辺諸国の脅威に絶えず翻弄されてきた歴史があります。そういう他国による力の支配を嫌というほど経験してきました。現在ウクライナを巡ってアメリカとロシアの緊張が続いておりますがウクライナの人々がどういう気持ちでこの時を過ごしているのかを考えると胸が痛みます。そこに繰り広げられているのは、結局は大国の力による支配です。支配する者は武力で攻め入り力で押さえつけ支配するでしょう。支配される側も恐れと諦めによってその支配を受け入れざるを得ない。残念ながらそういう支配がこの世で行われる支配なのです。

わたしたちの社会もそうです。昨年亡くなられた社会学者中根千枝氏の『タテ社会の人間関係』という本は古い論文ですが、今でも読み継がれているものです。日本社会の構造を「タテ社会」と呼び分析しているもので、現在でも十分通じる内容です。上司と部下、先輩と後輩など様々な序列が組織の中にあり、ヨコ同士は交流がなく対立し、連携不足が起こる。それが行政の縦割りによる弊害などの問題によく現れているでしょう。問題なのはそのタテ社会が狭い単一家や会社で構成されていること。師弟関係、親分子分の関係です。しかもその上下関係が同じ学校出身だとか、同郷だとか、好き嫌いの感情の上に成り立っているという非常に危ういものなのです。そういう極めて人間的、感情的なつながり、しがらみの中で築く関係ですから、良い時はいいですが、悪い時はもはや修復できない、手に負えないものになります。結局、そういう支配は「ワンマン」になり「黙って俺についてこい」的な強権的な支配になります。従う者も意見があっても何も言えず、仕方なしに従う。またそういう支配の仕方です。自分もまたそういう支配をするようになるのです。

10節「主を愛する人は悪を憎む」とあります。ここに「主を愛する人」とあるように、この詩人は神さまを愛する人と表現されます。こういう表現は旧約聖書ではめずらしいものです。ちなみにこの「主を愛する人」(10節)の「愛する」(アーハブ)は親子や夫婦などの親しい関係を表す言葉です。この言葉を用いることはそれなりにチャレンジだったのかもしれませんが。と申しますのも七十人訳聖書ではこの「愛する」の訳文にアガペーを用いています。それは神さまの愛を表す言葉であり、人間的な愛を表す別の言葉、例えばフィレオーやエロースではないのです。そういう人間的な愛を表す言葉を七十人訳聖書は避けたとも考えられます。しかしこの詩人は大胆にも親しみを込めて「主を愛する」(アーハブ)と記しました。恐れて従うのではない。愛をもって、しかも親しみを込めた愛をもって自発的にすすんで神さまに従う。それが聖書の示す神さまとわたしたち人間との関係です。

今、親しみを込めた愛と申しましたが、それは単に人間的、感情的なものに由来しておりません。その愛はしっかりとした契約に基づいています。申命記に「あなたに対する主の愛のゆえに、あなたたちの先祖に誓われた誓いを守られたゆえに、主は力ある御手をもってあなたたちを導き出し、エジプトの王、ファラオが支配する奴隷の家から救い出されたのである」(申命記 7 : 8) とあります。神さまがイスラエルを救われたのは、もちろんその愛のゆえですが、その背後には「先祖に誓われた誓い」つまりアブラハムとの契約があります。その契約ゆえに神さまはその愛をどこまでも貫いてくださる。決して裏切らない愛です。

そして言うまでもなく、この神さまの愛はイエス・キリストにおいてもっともよく表されました。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」(ヨハネ 3 : 16) と記されているとおりです。そしてイエス・キリストを通して救いの契約は更新され、その愛によるご支配は永遠に続きます。「どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできない」(ローマ 8 : 39) そのように強い御意志をもって神さまはわたしたちを愛し続けてくださる。だからわたしたちも信頼して神さまを愛します。

「主を愛する人は悪を憎む。主の慈しみに生きる人の魂を主は守り、神に逆らう者の手から助け出してください。神に従う人のためには光を、心のまっすぐな人のためには喜びを種蒔いてくださる」(10～11節) ここには神さまの愛のご支配に生きるわたしたちの具体的な生き方が示されます。それは「悪を憎み」また「光」と「喜び」という実りに満たされる人生です。それはキリストが約束してくださったように神さまを愛すること、そして隣人を自分のように愛する(マタイ 22 : 34～) 人生です。神さまに愛された者はそのように神さまを愛し、人を愛することができます。そこには強権的ではない温かく親しみのある愛の関係が築かれるでしょう。今の時代は「多くの人の愛が冷える」(マタイ 24 : 11) 時代です。でもわたしたちには神さまによる愛のご支配が与えられました。そこに世界の希望はかかっています。